

## 現代日本語におけるカタカナ使用の実態とその背景

増地ひとみ

### ■本論文の目的

本論文の目的は、現代日本語におけるカタカナ使用の実態を明らかにし、非外来語がカタカナで表記される背景を探究することである。本論文では、主に身近な資料から収集した非外来語のカタカナ表記の実例を提示して実態を示し、それらがなされる要因と、要因同士が関わり合う仕組みと原理を考察する。

### ■本論文の構成

本論文は、論文本体と、巻末の語彙表とから成る。論文本体は、序論と結論を含む全 11 章で構成される。巻末の語彙表は 2 種類あり、本論文が調査対象とした全ての資料から抽出された非外来語のカタカナ表記を品詞別および五十音順に配列したものである。

以下、【 】内は、その文字種を使用して表記されていることを示す。語形を表す時はカタカナで表記し、／／でくくる。

### ■本論文の概要

#### 第 1 章 序論

第 1 章では、本論文における研究の背景、問題の所在と目的を述べた。近年、日本語における文字言語の存在感と重要性が高まる一方で、表記行動を行う上ではさまざまな問題が存在する。それらの中でも重要なものの一つが「表記のゆれ」である。本論文では、表記のゆれの中でも漢字・ひらがな・カタカナ・Alphabet、つまり文字種間のゆれを扱い、特にカタカナの使用実態に焦点を当てる。

文字種の使い分けには、社会的に共有されている大まかな基準が存在するが、実際にはその基準を外れた表記が多く流通している。中でも多数観察されるのが、和語や漢語すなわち非外来語がカタカナで表記された例である。一例を挙げれば、「ズレ」「ギモン」「コツ」などである。このような大まかな基準を外れた非外来語のカタカナ表記が流通することで、表記主体が語を表記しようとして判断に迷う場面が生じたり、国語教育や日本語教育における問題が発生したりすることを本章では指摘した。

研究という立場から見ると、問題の所在は、非外来語のカタカナ表記を含めた文字種の使い分けに関わる条件を現状では明確に説明できない点にある。非外来語がカタカナで表記される理由として、さまざまな要因が先行研究によって指摘されてきたが、複数の要因の関わり合いに

よって一つの表記が出現する仕組みと原理を総括的に説明するには至っていない。以上のような状況を踏まえ、冒頭に示した本論文の目的を定め、第1章で提示した。

## 第2章 先行研究と理論的背景、本論文の立場

第2章では、まず先行研究を概観した。日本語学の分野における研究を中心に、「非外来語のカタカナ表記に関する研究」、「文字種全般、文字種の選択に関連する研究」、「その他一関連分野、周辺分野における研究」のそれぞれに関して見た。特に「非外来語のカタカナ表記に関する研究」については、《調査対象》《調査の規模と方法》《使用されている術語》の観点から整理し、批判的な検討を加えた。また、文字情報の「生産」「流通」「受容」の各過程<sup>1</sup>を分けて捉え、身近な文字資料に着目することの意義を述べた。

次に、本論文が拠る所とする理論的背景と使用する用語の定義とを並行して示した。本論文では特に、言語学の一分野である語用論の概念を複数導入している。使用する文字種を最終的に決定するのは人間であることから、人間を分析に介入させる語用論は本論文の分析と考察に有用であると考えられたためである。非言語的要因である「コンテキスト」(コミュニケーションが成立する場面、状況)と「コンテキストと連動した表記主体の意識」は、本論文において重要な概念である。また、待遇コミュニケーションにおける場面・意識・内容・形式の「連動」<sup>2</sup>も本論文において重要な視点である。

本論文においては先行研究ではカバーしていない文字資料を調査対象とし、未だ指摘されていない文字種選択要因を探り、さらには全ての成果を網羅的に統合して非外来語のカタカナ表記がなされる背景を探究することを目指す。ここで言う「先行研究」とは日本語学の分野における先行研究である。本研究における語用論は、未だ指摘されていない文字種選択要因を探るための手段であり、分析と考察のための枠組みという位置づけである。

## 第3章 テレビ番組の文字情報における非外来語のカタカナ表記

第3章では、テレビ番組の文字情報における非外来語のカタカナ表記を調査対象とした。実例を具体的に示しながら、「コンテキスト」および「表記主体の意識」という観点から非外来語のカタカナ表記がなされる要因を探った。「表記主体の意識」には「社会的規範」と「表記主体のストラテジー」の2側面<sup>3</sup>があるとの前提に立ち、考察を進めた。

まず、テレビ番組のジャンルや番組放映時の社会的な状況が、番組の文字情報で使用される文字種の比率と密接に関係していることを示した。そして、報道番組とバラエティ番組で使用される非外来語のカタカナ表記の違いから、報道番組では「社会的規範」が、バラエティ番組では「表記主体のストラテジー」が優位に働くよう文字種の使い分けによる調整がなされていることを指摘した。第3章における結論として、非外来語がカタカナで表記される時、先行研究で明らかになってきた要因に加えてコンテキストと表記主体の意識といった語用論的な要素も同時に作用しており、文字種と連動していることを主張した。つまり、文字種が選択され使い分けられる要因

の一つとして、語用論的要素が働いているということである。

#### 第4章 テレビCMの文字情報における非外来語のカタカナ表記

第4章では、テレビCMの文字情報における非外来語のカタカナ表記を調査対象とした。テレビCMの文字情報における非外来語のカタカナ表記の使用実態を概観するとともに、第3章で提示した考察結果を検証した。第3章では「文字種を選択要因の一つとして語用論的要素が働いている」との結論を得たが、その結論は、番組のジャンルによって非外来語のカタカナ表記の総体としての出現状況が異なることにより導き出されたものであった。しかしながら、番組のジャンルが異なれば使用される語自体異なるため、非外来語のカタカナ表記の出現状況の違いが、単に語の違いに由来している可能性を捨てきれない。そこで、同じ語が異なる文字種で出現した例を取り上げ、その表記の違いが語用論的要素の違いによるものかどうかを検証するのが第4章の趣旨である。

第4章ではまず、CMで使用される文字種の比率にはジャンルによる違いがあることを示した。続いて、／チカラ／／カタチ／／ケイタイ／を例に、各々が漢字・ひらがな・カタカナで出現したCMのジャンルやCM放映時の社会状況と、出現文字種との関連を検討した。それにより、CMのジャンルやCM放映時の社会状況といったコンテキストと、表記主体が文字種を選択する際の意識との関連、すなわち両者は連動していることを確認した。

第3章・第4章を通して、「コンテキスト」と表記主体の「意識」と文字種すなわち「形式」は連動しており、コンテキストの違いが文字種を選択する際の表記主体の意識に影響を与え、それが文字種という形式となって現れることを明らかにした。また、文字種選択要因は語ごとに、さらに同じ語であっても用例ごとに個別的であり、複数の要因が同時に働くという複合的・重層的な面を持つことを指摘した。

#### 第5章 Eメールにおける非外来語のカタカナ表記

第5章では、語用論的な要素の中でも表記主体個人の意識に焦点を絞り、Eメールに現れた非外来語のカタカナ表記を調査対象とした。ビジネス・シーンにおけるEメールで使用された非外来語のカタカナ表記を抽出し、同じ語が他の文字種で出現した例と比較しながら、カタカナ表記が出現する背景をポライトネス理論<sup>4</sup>の枠組みにおいて探った。／ヨロシク／／スミマセン／といった緩衝表現、またEメールの受信者・送信者の名字に現れるカタカナ表記を取り上げ、個人が持っている「基本表記」を外れた有標表記が使用される際、その背後に働く表記主体の意識を考察した。そこではポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしてのカタカナ表記の使用が認められ、「社会的規範」と「表記主体のストラテジー」というポライトネスの2側面が調整されている。本論文の目的である非外来語のカタカナ表記出現の背景という観点では、「ビジネス・シーンにおいては、フェイス侵害度がごく小さい場合に限定して、【ヨロシク】【スミマセン】などの緩衝表現に表記主体のストラテジーとしてのカタカナ表記が出現する」という条件を第3章の

結論として提示した。

第3章から第5章を通しての結論は、「場面」「意識」「内容」「形式」は連動しており、現代日本語において非外来語にカタカナ表記が使用される時、その背景には「語用論的要素」とりわけ「場面」と「意識」が要因の一つとして働いているというものである。

## 第6章 日用品のパッケージと交通広告における非外来語のカタカナ表記

第6章では、日用品や食品等のパッケージと交通広告における文字情報を調査対象とした。第3章から第5章では、コンテキストと表記主体の意識という観点から非外来語のカタカナ表記の実態を探った。つまり「生産」「流通」「受容」の各過程のうち、「生産」の過程に注目した。第6章では表記の「流通」という観点から非外来語のカタカナ表記の実態を示すとともに、「受容」の面にも触れた。パッケージと交通広告はいずれも、現代を生きる日本語使用者の日常生活に密着している点で重要な文字資料である一方で、記録されて後世に残されていくことがない。そこで第6章では、収集した非外来語のカタカナ表記の実例を提示しつつ分析を加えた。そして、パッケージにおける非外来語のカタカナ表記の特徴として、似た属性の語や基本語彙に含まれない一定数の語で出現すること、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)に収録された媒体や若者雑誌とは異なる語に出現する傾向があることを指摘した。今一つの調査対象である交通広告に関しては、交通広告における非外来語のカタカナ表記は、パッケージとは出現傾向が異なることを述べた。一方で、パッケージにおいてはパッケージという「媒体(場)」と「語」と「表記」が連動し、交通広告においても「商品・サービス」と「語」と「表記」が連動しているという共通点を明らかにした。

以上の結果を踏まえ、パッケージと交通広告における文字情報が受け手の表記意識に与える影響について接触と受容の観点から考察した。そして、文字種が選択される背景にある要素として「この語はカタカナで書かれる」という直観的感覚を指摘し、「カタカナ表記存在感覚」という術語を提案した。パッケージや交通広告の文字情報に接触することが受け手の表記意識に与える影響の一つめは、「媒体や場と連動したカタカナ表記存在感覚」が形成されていくというものである。そして二つめは、「個人における表記の基準感覚」の形成である。ここでも、媒体や場と連動して表記の使い分けの意識が形成されていく。それが似た属性の語に波及して、臨時的なカタカナ表記の出現にもつながる。そのようにして出現した表記が流通し、接触と受容を経て循環をくり返し、パッケージや交通広告といった閉じられた特定の場で頻繁に用いられる表記として定着していくという動きを認めることができるのである。

## 第7章 学術雑誌における非外来語のカタカナ表記

第7章では、非外来語のカタカナ表記が出現しにくい資料である学術雑誌を用いて、非外来語のカタカナ表記の出現にコンテキストが影響するか否かで語を分類するという、先行研究にはないアプローチで考察を行った。本論文では一貫してBCCWJに含まれていない文字資料を取り上

げているが、学術雑誌もその一つである。カタカナで表記される非外来語には、コンテキストによってはカタカナ表記で出現しないものと、コンテキストに関わらずカタカナ表記されるものの2種類があると解釈できる。それぞれの語群を特定することは、どのような語がどのような場合にカタカナで表記されるのかという条件の一端を示すことにつながる。

第7章では、まず現代日本語におけるカタカナの役割を整理し、現代におけるカタカナの規範的な役割と準規範的な役割とを提示した。マスメディアや教科書関連の出版社が有する「表記の手引き」類から共通する項目を抽出し整理した上で、カタカナの規範的な役割は、外来語、外国語、オノマトペ、動植物名を表記することであるとした。また、準規範的な役割は、俗語、専門的な用語、助数詞等を表記することであるとした。これらを表記することが「カタカナの役割」であると定め、論を進めた。

学術雑誌において、これらの語以外にもカタカナが使用されているのかどうか第7章の焦点である。予備調査の結果、カタカナの用法が最も多様であり、学術雑誌全般における用法をカバーしていると考えられた『国文学研究』（早稲田大学国文学会発行）を本調査の対象とした。そして本調査の結果、学術雑誌全般におけるカタカナはほとんどが規範的あるいは準規範的な役割をもって使用されていると結論づけた。次に、予備調査で使用した学術雑誌も含めた全調査対象から抽出した「役割外のカタカナ表記」、つまり先述した「カタカナの役割」を外れた表記28件の中から、コンテキストがカタカナ表記の出現に影響しない非外来語群を特定した。それらの語群においてカタカナが選択される時には、コンテキスト以外の要素が優位に働いているということになる。

非外来語のカタカナ表記のなされる要因は多々指摘されてきたが、どのような語がどのような場合にカタカナで表記されるのかという条件やカタカナ選択に関わる仕組みと原理は明らかにされてこなかった。その様相は非常に個別的であり、一般化が困難なものである。本章では「コンテキストに関わりなく出現するカタカナ表記」を特定することで、その条件の一端を示した。また、非外来語のカタカナ表記出現要因と関連して、「慣用カタカナ表記」という術語を立てることを提案した。さらに、これまで明確にされてこなかった、カタカナによる「標準的」な表記の定義を行った。すなわち、カタカナの規範的あるいは準規範的な役割に沿ってなされたものを「標準的」なカタカナ表記とした。本論文の目的である非外来語のカタカナ表記出現の背景という観点では、「カタカナ使用が標準的である語群、およびカタカナ使用が標準的ではないが慣用と認められた語群は、コンテキストに関わりなくカタカナ表記される」という条件を提示した。

## 第8章 文字列環境と非外来語のカタカナ表記

第8章では形式の面に着目し、文字列環境と非外来語のカタカナ表記出現傾向の関係を探った。非外来語のカタカナ表記の前後にどの文字種が接しているかという文字列環境によって非外来語のカタカナ表記の実例を分類し、先行研究で指摘されてきた非外来語のカタカナ表記出現要因「文字列への埋没回避」が妥当かどうかを検証した。これは表記の「生産」の過程に関わる要因であ

る。結果、文字列への埋没を回避しようとする意図が、一定数の非外来語のカタカナ表記の選択要因となっているとの結論を得た。一方で、埋没回避は二次的・副次的な要因であり、単に埋没回避だけを目指した表記はごく少数である可能性も見て取れた。埋没回避が目的でない想定される非外来語のカタカナ表記においては、埋没回避以上に優先される要因があり、何らかの意図のもとで積極的に非外来語のカタカナ表記が選び取られている可能性があることを明らかにした。

本論文の目的である非外来語のカタカナ表記出現の背景という観点では、「どのような語が、どのような条件のもとで文字列への埋没回避のためにカタカナ表記されるのか」という問いに対し、以下のような条件を提示した。

- ・使用できる漢字がない語が、語の前後またはそのいずれかでひらがなに接している場合
- ・使用できる漢字がある語が、漢字を使用すると語の前後いずれかが漢字と連続する文字列環境にある場合。かつ、ひらがなを使用すると語の前後またはそのいずれかがひらがなと連続する文字列環境にある場合
- ・以上の条件を満たす語のうち、特に属性が和語と副詞であるもの

## 第9章 非外来語のカタカナ表記出現要因の関わり—CMの文字情報を例に

第9章では、非外来語のカタカナ表記が出現する際の要因相互の関わり合いについて検討した。複数の要因が関わり合う仕組みと原理をCMの用例を用いて考察し、条件や語の異なりによって要因間の力関係が変化する様相の一端を示した。また、条件によって変化する要因構造を用例ごとに個別に把握することができる式（モデル）を次のとおり提示した。

$$N = \{\alpha 1 + \alpha 2\} - \{\beta 1 + \beta 2\}$$

$\alpha 1$  : 促進要因として働く非言語的要因       $\alpha 2$  : 促進要因として働く言語的要因

$\beta 1$  : 抑制要因として働く非言語的要因       $\beta 2$  : 抑制要因として働く言語的要因

要因構造の様相は個々の例ごとにバリエーションに富むが、その背後に働く要因は「非言語的要因と言語的要因」「促進要因と抑制要因」「固定的要因と変動的要因」という次元の異なる3つの切り口、分類軸で捉えることが可能である。これらの要因の掛け合わせによって、一つひとつの用例は出現していることを示した。

## 第10章 非外来語のカタカナ表記が出現する背景

第10章では、先行研究で指摘されてきた要因を抽出し、第9章で示した3つの切り口、分類軸のうちの「非言語的要因と言語的要因」によって大別した。さらに各々を分類・整理して、要因一覧として示した。大まかには以下のとおりである。1Aや1Bに、さらに下位分類された要因がある。全ての要因は固定的要因と変動的要因のいずれかにも分類される。

### 1. 非言語的要因

1A. 場（コミュニケーションが行われる場面）

- 1 B. 場 (物理的な場)
- 1 C. 意識 (非言語的な側面に関わる表記主体の意識)
- 2. 言語的要因
  - 2 A. 意識 (言語的な側面に関わる表記主体の意識)
  - 2 B. 形式 (言語に属する側面)
  - 2 C. 表現効果

次に、本論文で調査した全ての資料から抽出された非外来語のカタカナ表記をまとめた語彙表を参照し、それらの表記が出現する要因構造を、先述した式を用いて品詞別に提示した。要因一覧で各要因に付した記号を式に当てはめ、どの品詞がどのような固定的要因を要因構造の要素として持つのかを示した。例えば名詞(一般)、和語で漢字表記のない語群は、次のように表される。

$$N = \{ \alpha 1 + \alpha 2(2B1a, 2B20, 2B21) \} - \{ \beta 1 + \beta 2 \}$$

※要因一覧より：2B1a＝漢字表記がない、2B20＝品詞、2B21＝語種

この基本的な構造に、用例ごとに別の要因が加わる。また、変動的要因もその都度加わり、表記の多様性が生み出されるのである。

第 10 章ではまた、表記主体の意志がいかなる要因よりも優勢であること、つまり最上流要因であることを述べた。「どのような語が、どのような時に、どのような要因によってカタカナ表記で出現するのか」という問いに答えつつ、非外来語のカタカナ表記出現の背景を探った。

促進要因に焦点を当ててきた従来の先行研究は、「カタカナ表記を抑制する要因」には着目してこなかった。第 10 章では、抑制要因として以下を指摘した。

- ・語種が「漢語である」という属性 (言語的・固定的な抑制要因)
- ・「常用漢字で書ける」という属性 (言語的・固定的な抑制要因)
- ・同音異義語が存在する語において、前後の文の内容からしてカタカナ表記ではどちらの意味かがわかりにくくなるという「文脈」(言語的・変動的な抑制要因)
- ・カタカナ表記だと語義を理解しにくい語であること (言語的・固定的な抑制要因)

## 第 11 章 結論

以上の総まとめとして、非外来語のカタカナ表記が出現する背景として本論文が提示する結論、および本論文の意義は以下のとおりである。

まず、非外来語のカタカナ表記が出現する要因には「非言語的要因と言語的要因」とがあり、大枠として二重構造になっている。そして、その各々において複数の要因が絡み合うという多重構造である。この一見当然のように思われる要因の構造について指摘し、その仕組みと原理を記述しようとした先行研究は存在していない。本論文ではさらに、非言語的要因の中でもコミュニケーションの仕組みを考える時に欠かせない要素である、コンテキストとそれに連動した表記主

体の意識が、カタカナを含む文字種選択の背景には働いていることを指摘した。これもまた、先行研究には不足していた視点である。

本論文では、文字種が選択されるにあたってコンテキストの影響を受けない語を特定した。文字種が選択されるにあたりコンテキストの影響を受ける語と受けない語とを区別して捉えるという考え方は従来なされてこなかった。この両者を区別することはそのまま、非外来語がカタカナで表記される条件の一端を示すことである。

さらに、「非言語的要因と言語的要因」に加えて、カタカナを含む文字種選択要因は別の側面、分類軸による捉え方も可能であるというのが、本論文が提示する結論である。すなわち、「促進要因と抑制要因」「固定的要因と変動的要因」である。「固定的要因と変動的要因」はその語や表記に付随しており原則的に変化しないが、「促進要因と抑制要因」については、全ての要因がどちらとしても働きうる。「非言語的要因と言語的要因」「促進要因と抑制要因」「固定的要因と変動的要因」という次元の異なる3つの切り口、分類軸による、次元の異なる要因が掛け合わされ、個々の用例において文字種が選択される際に作用する。要因同士の力関係は用例ごとに異なり、力関係の変化によって表記のバリエーションが生じる。

これらが、文字種が選択される仕組み、すなわちカタカナ表記が出現する背景にある仕組みと原理である。そして、文字種が選択される仕組みの根本にあるのは常に表記主体の意志である。本論文で検討してきたのは、「表記主体による最終的な決定」、つまり意志形成の背景にある、要因同士が関わり合う仕組みと原理なのである。

今後の課題として、隣接分野の有益な理論や手法を摂取することや、調査対象の検討、意識調査の実施などが挙げられる。日本語学の分野における研究成果を周辺分野、他分野に資するものとしていくことも、今後いっそう求められるであろう。

## 【注】

---

1 「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 設計の基本方針」国立国語研究所コーパス開発センターホームページによる。 [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/basic-design.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/basic-design.html)

2 蒲谷宏 (2006) 「「待遇コミュニケーション」における「場面」「意識」「内容」「形式」の連動について」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』 19 pp.1-12。

3 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に」『社会言語科学』 5(1) pp.56-74 における術語「個人のストラテジー」を「表記主体のストラテジー」としたものである。

4 ブラウン, ペネロピ・レヴィンソン, スティーヴン C. (2011) 『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象』 田中典子監訳、斉藤早智子他訳 研究社 による。